

研究結果

本研究では、ベトナム・仏印・日本の関連資料を精査し、それぞれの研究者の視点から、戦前期の日本の対仏印経済・貿易政策を検討した結果、以下の点が明らかになった。

第一に、戦前期の日本企業は、仏印北部にある「戦略物資」としての鉱物を、仏印南部にある「戦略物資」としての米・ゴムを獲得するため、仏印へ進出した。外国の仏印進出に対して排他的な政策をとっていた仏国に対して、日本は、仏印の排他的経済政策・関税障壁を乗り越え、日本の企業の仏印への進出や、日本商品の仏印への輸出増加を促進する政策で対抗した。

第二に、1930年代の日本と仏印間の貿易は漸進的に発展したが、仏印側から見ても日本側から見ても、双方の貿易関係はまだ希薄であった。ところが、1940年代の日本の対東南アジア貿易の中で、対仏印貿易は急速に拡大し、対東南アジア貿易の中で第一位の地位を占めるようになった。しかし、その貿易量拡大は自然なものではなく、日本軍の仏印進駐を背景とした軍事的威嚇による強制的な発展であり、また太平洋戦争勃発中の日本の食糧・物資確保を目的とした貿易拡大であった。さらに、日本の対蘭印、英馬、フィリピン貿易の減少の結果としての相対的な増加であったとも考えられる。また、仏印・日本貿易の構造も激変した。仏印からの輸出において、1920年代には、米が輸出総額の約60－90%を占めたが、1930年代には石炭が輸出総量で85%、輸出総額で50%を占めるようになった。また輸出総額の40%はゴム、鉱産物が占めるようになった。しかし、1940年代になると、米を中心とする食料輸出額が再び増加し、輸出総額の約70%を占めるようになった。他方、日本からの輸入では、一貫して織物が最大の輸入商品であり、金額・数量とも年々増加していったが、1942年には、輸入総額の70%を占めるまでになった。

第三に、仏印の対日貿易は一貫して出超であり、特に1940年代に入ると、太平洋戦争の下で日本の対仏印貿易入超は益々深刻になった。これに対応して、日本は入超の決済を「特別円」によって行った。この決済制度は、日本が巨額の資金を調達し、その立替えのためにピアストル貨をほぼ無制限に乱発することによって、他の南部占領地との買い取り貿易と同様に、対仏印貿易の実態を、戦略物資、食糧の収奪貿易へと変化させたものであった。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

1. Nguyen Tien Luc、戦前期の日本の対仏印経済貿易政策、国際シンポジウム『東南アジアにおける日本研究』、ハノイ、11月2009年 【日本語】。
2. Nguyen Tien Luc, Vi the cua Viet Nam trong quan he Nhat Ban-Tieu vung song Mekong, Hoi thao Quoc te “Nhat Ban-Tieu vung song Mekong-Moi quan he lich s u”, TP Ho Chi Minh 29-30/10/2010 (du dinh). (「日本・メコン川地域関係の中のベトナム位置」、国際シンポジウム 『日本・メコン川地域－歴史のかかわり』、ホーチミン市、2010年10月29日－30日 (予定)。

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

Nguyen Tien Luc, Nam Bo trong lich su quan he kinh te-thuong mai Viet Nam-Nhat Ban, *TC Nghi en cuu Dong Bac A*, Ha Noi, 11-2008. (「ベトナム・日本経済・貿易関係史の中の南部地方」、『北東アジア研究』雑誌、ハノイ、2008年11月。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

Nguyen Tien Luc (Chu bien), Quan he Viet Nam-Nhat Ban thoi can dai, NXB Da i hoc Quoc gia TP Ho Chi Minh 2011 (du dinh). Nguyen Tien Luc編『近代のベトナム・日本関係史』、ホーチミン国家大学出版社、2011年発行 (予定)。